

「スクランピング・アンド・ビルド COURTNEY」

昨年訪れたドイツ・ハノーバーで催されたアグリテクニカ話の最終章である。本日はGPS関連やマッピング、施肥管理の話をしたのだが、興味を持っていただける生産者よりも、オラッチには関係ねーと世界のバイオの流れを知ろうとしない前近代的な発想、そしてTPP締結後の農業は現在よりも、もっと農政のあり方で、農業が変化することを理解できない方は、現場から切り捨てられ、いや、もとい！新しいことを考えるだけで、うまくやれると信じている前頭葉農業に興味がある方たちの心配は政府も関与しないので、私も無駄な努力はしないで高みの見物というこう。

さて、トラクタの話である。
ドイツ・マンハイムには米国資本のディア社が作るトラクタ工場がある。今回の工場ツアーはホクトヤンマー株式会社の小野寺誠さんに紹介していただき、ドイツ・ツアー最後の日を飾ることになった。工場案内は北海道にも数回来たことがあるエリックさんだ。融通が利かない典型的なドイツ人ではなく、ロシア人、中国人など年間数千人の訪問者のガイドをする元国外担当のセールスマ

ンでもある。

いろいろな工場を見て回ったが、やはりディア社の工場は特別なものを感じる。だが、他社の工場と違い特別なマシンを使っている感じはしないし、従業員がすごくマジメと言う訳でもない。一番の違いは床だ。床がきれいなのだ。米国の工場でもそうだったが、ディア社の工場は他社の工場と比較して明らかに違いがある。そういえば、日本経済新聞・わたしの履歴書の3月で紹介された大和ハウスの樋口武男さんも、勝負は足元の靴で決まる、云々と書かれていた。

このトラクタ工場はもともと、ディア社の工場として作られたわけではなく、日本にも戦前から輸入されたことがあるランツ・トラクタを製造していた。そして第二次世界大戦中は英国から発進した連合国のB17などで、徹底的に爆撃の標的になり、被害を受けることになったが、それには理由があったのだ。第二次世界大戦時、北アフリカ、イタリア、フランスへと進軍した米軍と連合軍は

ディア社のトラクタ工場 の床はピカピカでした。

Vol.50



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

米軍製のM4・シャーマン戦車よりも明らかに口径が大きく、破壊力が強いドイツ帝国が製造する世界最強と言わしめた、ティガー戦車に悩まされることになった。しかし戦車での戦いで圧倒的に強いティガー戦車でも、数の論理に勝る連合国の前では為す術もなく、結果的に歴史に埋もれる運命となったのは、同時期の太平洋戦線の日本軍の将来を暗示させたことはト

オレにも
言わせる!

北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信

ラクタと関係するのかわ?

実は、その当時、ランツ社とディア社はヨーロッパ戦線で戦いを始めていた。あのボルシェ博士が命名したティガー戦車がドイツで作られ、同時期米国にあるディア社はM4・シャーマンタンクの主要部品を作っていたのだ。戦後、ディア社がヨーロッパに進出するに当たり、どこにするのか考えた末、1956年にあのティガー戦車を作った、宿敵ランツ社を買収することになったそう。ここまで来れば冒頭の、アメリカがイラクやアフガンでやっていて、歴史的に得意とする、「スクラップ・アンド・ビルド」ってことですか?」の意味を理解していただけるだろう。ガイドのエリックさんに「当時のランツ社を空爆させて、再建のためにたっぷりお金を使わせて最終的にはランツ社を乗っ取るのは、10年先を見越したディア社の計画だったのでは?」と聞いたとき、「ノーコメント」と言いながら軽くウィンクをしたように見えたのは、わたしの勘違いだったのだろうか。このことはジョン・ディアトラクタを扱うヤンマーさんあたりでもご存じないのかもしれない。世界のトラクタ工場を見て回った知識と、好きに含蓄まがいの無用なことを書く能力は間違いなく、金髪・ブルーアイ

との交流に役立つのだ。

工場案内をしていただいたエリックさんと北海道の生産者4名はランチの時間になり、施設のご真ん中にある大きな食堂に案内された。食事中、案内をしていたいた時に気になったことがあったので聞いてみた。「もしかして飛行機に乗っていただけますか?」の問いに「なんでわかったのかな? もしかしてあなたも?」となった。彼は時々ETA(予定到着時刻)とETD(予定出発時刻)の単語を使っていた。ETAはアメリカ映画の中で時々出てくるが、ETDまで使う一般人はそれほど多くないと感じたからだ。彼は実際にグライダー・パイロットで2000回以上の着陸をしているベテラン・パイロットであった。ドイツがなかなかやるなど感じるこの一つに、このグライダーがある。第一次世界大戦が終了して、つい最近までドイツが戦勝国に賠償金を支払うことになった、ベルサイユ条約が締結されたことは日本の教科書でも出てくる。その条約の中に航空機の製造に関してかなり厳しい条件が存在した。そこでドイツは、あの面倒だ。それだったらエンジンのないグライダーを作ってみよう! と考えた。その後ドイツの一方的な条約破棄で戦闘用の航空

機が作られ、第二次世界大戦に突入したが、再びドイツは敗北。エンジン付き航空機は絶対まかりならぬと、連合国からお沙汰が出たが、またしてもドイツは一休さんもびつくりのトンチを働かせた。グライダーにエンジンを搭載してしまっ

たのだ。現在でも日本を含め、ほとんどの国でも同じような法律になっていると思うが、グライダーにエンジンを搭載した航空機はモーターグライダーと呼ばれ、ほとんど同じ飛行性能がある2人乗りのセスナ152とは別のカテゴリーになっている。このグライダーの操縦資格は私も所持しているが、エンジン付きとは、また違ったシビアな乗り物である。なんとと言ってもエンジンが付いていないので、着陸のやり直しができない一発勝負である。エンジン搭載機についてグライダー・パイロットからは「あゝ、あの人生(着陸)やり直せるエンジン付きの飛行機ね……」と頭上90度のアクロバット技のハンマー・ヘッド目線をいただくこともある。

2年で農地が買える農業

ドイツ話の最終章はラトビアという国の話である。この2年くらいのブームらしいが、ドイツ人がラトビア人の農地を正式に売買、もしくは賃貸を結んで、現地で菜種を栽培して、アテにならない鉄道や陸路を使わず、レガ港から海路ドイツまで運んで売買しても十分採算が合うとドイツ生産者が話していた。つまりこの菜種は3~4t/haの収穫量があり、価格は200~250ユーロ/tになる。ha当たりの売上は600~1000ユーロ(約6万~10万円)。2年栽培したら、現地の農地が買える農業が出来る。では農地はどのくらいになるのか計算してみた。利益率を30%として750ユーロ×2年×30%≒450ユーロ/ha≒5万円/haになる。確かに農地は安いのだろう、昨年から北海道・音威子府でソバ作りを始めた福井県の片岡仁彦さんの農地並みだ。そうだ! この情報はすぐに青森の木村慎一さんに連絡せねば。ところで、そんなドイツ人の農業を見て、ラトビア人は黙っているのだろうか? 答えは歴史の教科書通りであった。富を作らない共産主義を半世紀以上続けた精神行動からはマトモな農業のみならず、働く意欲まで破壊することになる。となると、日本農業の小作人根性農業から世界標準バイオ農業の基礎ができるためには、今日スタートしてもたった67年後に追いつくことができる計算になる。